

白石 美雪

湯浅譲二：『^{エレジイ}哀歌』オーケストラのための

湯浅譲二の作品を音楽的発想の視点からみると、二つの系統に整理できる。一つは『クロノプラスチック』や『オーケストラの時の時』といった音響運動のイメージが核となる系統、もう一つは歌曲や『内触覚的宇宙』など特別なタイトルをもち、言葉からの発想を内容とする系統である。

本作は後者の系統に属する。2008年、玲子夫人が亡くなり、湯浅は作曲できない日々が続く。この気持ちに区切りを付けようと、メトロポリタン・マンドリン・オーケストラからの委嘱を受けて、この曲に取り組んだ。編曲版は若干、変更しながら、マンドリン族の楽器とギター、コントラバスのパートを弦五部に置き換え、原曲と同じく、ティンパニとヴィブラフォン、ハープとピアノの4楽器を加えている。

冒頭はfis(ファ#)のユニゾンで始まり、低音弦の重い刻みが死の衝撃を伝える。すばやい上行音形が入ると、今度は高音弦の抒情的な旋律と哀しみを映す下行音型が主体となる。緩やかなテンポでたゆたう部分を経て、夢幻的な和音が紡がれる終結部へ。ハープとピアノのきらめくモチーフを伴う低音弦の旋律にはどこか安らぎも宿る。

Hrp - Pf - Vib - Timp - Strings (10-8-6-4-2)

湯浅譲二：『オーケストラの時の時』オーケストラのための

「完全な作品」と自負する本作は、それまでの湯浅の音楽的思考が凝縮された代表作の一つである。ヴァレーズの圧倒的な音響エネルギーと、クセナキスの数理的な作曲法に宿る生命力から深く感化された湯浅は、クセナキスの『メタスタシス』(1953~54)と同じく、この作品を発想の段階からグラフで記譜し、のちに五線譜のスコアに変換している。グラフの上方に記された矩形や三角形、矢印に音色、強弱、テンポ、運動のベクトルを与え、そこに音と休止をランダムに配置しながら、分布の密度を変化させると、拍節とは無関係の、無機的な音楽構造が実現する。また、二オクターブにわたる十二音の音列技法がこの曲で開発され、のちの作品にも応用。細部では奏法の違いで音色や音響エネルギーを変える手法も実験されている。

全3部が続けて演奏される。第1部は多様な特徴をもつブロックから構成され、空間的な遠近法を形成する。トランペットとホルンによる華麗な断章、低弦楽器のすばやく力強い動き、つんざくような木管楽器の高音と、音色やスピードの異なる音群が次々に交代し、空間に広がって層をなす。そこから生じるエネルギーが音響を先へ先へと推進する。第1部最後のヴァイオリンとヴィオラの音を持続したまま、第2部が始まる。音響エネルギーの

推移が連続的な無数の線のかたまりとなり、第1部とは異なる流動感をもたらす。トゥッティによる最強音に達したのち、点描的に音がはじける第3部に入る。弦楽器に第2部の面影を残しつつ、やがて第1部のブロック構造がよみがえる。高音の弱音で消え入るように終結する。

4 Fl (Picc / 2 A-Fl) / 4 Ob (E-Hrn) / 4 Cl (Es-Cl / Bs-Cl) / 4 Fg (2 C-Fg) - 6 Trp / 6 Hrn / 4 Trb (2 Bs-Trb) / Tub - 5 Perc (I = Vib / Tom-Tom / Suspended Cym II = Xyl / Tubular Bells III = 6 Cowbells / Mar / Glock / Claves / Tam-Tam / (Xyl) IV = Cast / (Cel) / (Xyl) / (Mar) / Wood Blocks / Bass Drum V = 4 Timp / Wood Blocks / Tri / Tom-Tom) - Hrp - Pf - Strings (12-12-12-10-8)

初演 1977年4月22日、23日 NHKホール
NHK交響楽団第720回定期演奏会 ミハエル・ギーレン(指揮)

湯浅譲二：『オーケストラの軌跡』

サントリオ芸術財団は2回目の「作曲家の個展II」のために、一柳慧と湯浅譲二に新作を委嘱した。ところが、ちょうどスケッチを始めた頃、湯浅は脳梗塞で倒れてしまう。懸命のリハビリを行う中、何とかまとめた冒頭部分のみを『軌跡』の一部として、2017年10月30日に初演。2分ほどだったが、力強い音響は彼の健康状態への心配を払拭した。

『軌跡』というタイトルからは、音響運動が描く音像が目には浮かぶ。しかし、同時にこれまでの人生の「軌跡」といったニュアンスも感じる。今年94歳の作曲家はその後、肺炎を患って入退院を繰り返す。当初の構想とは異なる形でまとめられた今回の新作には、おのずと病魔との苦闘も刻まれたはずだ。指揮者の杉山洋一は「(これまでの曲では)音群の強い意志で動いていたものが、一つ一つの線がみえてくるところまで近づいてみたら、それぞれが遠近感をもった世界を作っていたことを実感させる」と、この曲を表現した。

5~6分の単一楽章。3管編成のオーケストラが強音で炸裂する部分を含んでいるが、比較的テクスチュアはうすい。冒頭の大音響のあと、トロンボーンとチェロによる旋律が現れ、ブロック的な動きと旋律的な動きが層をなす。後半に入ると、金管楽器は完全に休止。やがて弦合奏を中心とする水平の動きが層をなす上で、木管に連打のモチーフが続き、エネルギーが満ちたところですっと終わる。

3 Fl (Picc) / 3 Ob (E-Hrn) / 3 Cl (Bs-Cl) / 3 Fg (C-Fg) - 4 Hrn / 3 Trp / 3 Trb / Bs-Trb - Timp - Vib / Xyl / Mar - Hrp - Pf - Strings

(しらいし みゆき・音楽学)